



「機電一体型技術集団」としてお客様の要望にこたえていく

株式会社三立 奈良県大和郡山市

株式会社三立は、自動車産業を始め、携帯電話、工業用ベルト等、様々な業種の生産設備で活用される機械、電気設備、ソフトの設計及び製造を行っている。

同社は、社員数 50 名程度ながら、機械の設計から、製造、電気制御、据付、試運転を自社で完結できる「一貫生産体制」を持つ強みを有している。

また、アメリカ、ドイツ、イギリス、中国、タイ、インドなどに直接交渉可能な取引先を有し、海外へも自社製の機械を積極的に納入するなど、国内だけでなく世界的にも貢献している会社である。

会社概要



会社名：株式会社三立
所在地：大和郡山市横田町 182-1
電話：0743-56-3731
FAX：0743-56-3575
創業：1966（昭和 41）年 4 月
設立：1966（昭和 41）年 11 月
代表者：代表取締役社長 小林 晃
資本金：20,000 千円
従業員：52 名
事業内容：産業用機械設計製造
URL：<http://www.kk-sanritsu.com/>

一貫生産体制の確立

株式会社三立は、昭和 41 年 4 月に現会長である木本幸満氏が、大和郡山市に工作機械の設計事務所「三立機械設計事務所」を立ち上げたのが前身で、同年 11 月に法人化し、株式会社を設立。木本幸満氏が社長に就任した。

当初は、大手企業の自動車部品の生産ラインの設計を行っていたが、取引先から設計だけでなく機械製造に関する要望も強くなってきたことから、工作機械製造を開始した。

昭和 45 年 10 月から、電気制御に関する業務を大阪営業所にて開始。昭和 49 年には、あらたに大和郡山市にて電気制御盤の組立工場を設立。機械事業部と電気事業部を設置することで、開発から機械設計、組立、ソフト開発及び電気制御盤製作、運転調整まで、自社で完結することができる一貫生産体制を構築した。

当時、一貫生産体制を持つ会社は少なく「機電一体型技術集団」として、お客様に満足いただける製品作りが確立した。

その後、平成 8 年には、社名を株式会社三立に変更。平成 27 年には創業 50 周年を迎え、昨年 5 月に小林晃氏が社長に就任し現在に至っている。

「工業用ベルト生産ライン」と海外進出

同社は、機械の設計段階から多種多様な注文への対応が可能であり、「取引先の要望にできる限り応える」をモットーに、取引先からの信頼を勝ち得てきた。同社が受注生産したユニークな機械の一例として、ケーキ用の紙カップを 0.5 秒に 1 個生産できる「カップ成形機」や、携帯電話の表面ガラスのふちを整える「面取機」など、個々の取引先のニーズに応じた様々な分野の機械の開発・



本社社屋

製造に携わってきた。

同社にとって業容拡大の転機となったのは、平成元年頃から、大手工業用ベルト生産メーカーから工場内の生産ラインの開発、製造を受注したことである。同メーカーと共同で生産ラインの開発に携わり、信頼関係を構築することができた結果、関連会社で伝動用ベルトの世界トップメーカーとも取引を開始。世界各地の工場から「工業用ベルト生産ライン」を直接受注するようになる。これを機に、自動車産業関連から「工業用ベルト生産ライン」の製造に重心を移し、積極的に海外進出を果たしていくこととなる。



工場内での工業用ベルト生産ラインの組立作業

「会社は人」との考えのもと成長していく

同社は、木本会長が普段から口にしていた言葉である「みんなで幸せになろう」を株式会社三立への社名変更時より社是としている。小林社長も「会社は人」と言うように、「取引先や、社員とその家族、会社に関わる全ての人々が満足でき幸せになる、みんなに喜んでもらえる製品作り」を目指している。

小林社長は就任時に「人材面」「製品面」の2つの目標を掲げた。

まず、「人材面」については『「会社は人」との考えのもと人材育成に力をいれる』ということ。

「30代後半から40代の人材が少なく、若手の育成が急務である」と考え、「会社内で『生きてい

ない場所』はないか、『活かされていない人』はいないか」に着目し、あらゆる無駄をなくし、適材適所に人材を配置することで社内の活性化を図りたい」と考えている。

また、今後、求められる人材は「お客様と一緒に考えてもらえる人材、製品の話ができる人材」と語る小林社長。社長自身が若い頃に経験した取引先との生産ラインの共同開発では、思うように開発が進まず、先方の担当者から叱責されることもあった。しかし「時間はかかったが、一緒になって最後までやり遂げたことで、今も当時の担当者とは懇意にしており、取引も継続している」と言う。こうした経験があるからこそ、人とのつながりを重んじ、若手人材の育成と活用への思いは強い。

次に「製品面」では、「1つの柱を作る」ということ。「競争の厳しい業界において、今日まで事業を継続してこられたのは、お客様のどんなご要望にも『NOと言わない』『まずトライする』という姿勢を貫いてきたからだ」と小林社長は語る。しかしその反面『「何でもトライする」という方針は、別の視点から見れば『得意分野、柱がない』ということ』でもある。そこで、「今後は、現在好調な『工業用ベルト生産ライン』を会社の製品面での柱として一貫生産技術を磨きつつ、より多様なお客様のニーズに応えていきたい」と考えている。

電気制御によるオートメーション化が進む工作機械だが、その制御、保守には、やはり人の手が必要であり、その機械を使う人にとっての使いやすさを考慮した設計が必要である。

今後も「工業用ベルト生産ライン」の開発、製造を軸に、人とのつながりを重んじ、「機電一体型技術集団」としてお客様の要望にこたえていくことであろう。

(中井正人、前田 徹)